



自治っていったいなんだろう

ある日の昼休み、廊下を歩いていると神妙な顔の4年生の子どもたちに出会いました。ちょっと聞き耳を。

『あろえ』の『あ』は『あいさつ』だから、あっちから歩いてきて、そこであいさつして…」

「もうちょっと向こうから歩いてきて。そして、もっと早く、自分からあいさつしているって動画に…」

よくよく聞いてみると、「あろえ」は本年度当初、生活指導の直理先生から、こんなことを頑張してほしい

と願った3つのこと（あいさつ、廊下歩行、笑顔になる靴箱）。そして、今回の動画は、中学年で目標にしている「すすんであいさつ」を自分たちなりに考え、こうしたらどうだろうという提案をみんなに投げかけるものだったようです。

なんて素敵なお子どもらなのでしょう。

こんな場面に遭遇した時、ふと、学校は何のためにあるのだろうか、考えることがあります。もちろん、学力をつけるため。体力をつけるため。友達と仲良く過ごすため。いろいろな機能が、学校にはあると思います。そして、その中核になるのが「民主主義を学ぶため」ではないかと思うのです。民主主義は、人類が発明したみんなです生活するための方策だといわれていますが、割と誤解されて受け止められることがあるともいわれます。その最たるが「多数決の原則」。多数を占める意見が採用されるという考え方ですね。

よく考えると、これは強者の考えです。

昨今、このような民主主義の解釈が見直されつつあります。なぜか。LGBTQ+を例にとり、その理由に迫ってみたいと思います。ニュース等でも話題に上がるLGBTQ+（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーやそれ以外の様々なセクシャリティーがある）は、セクシャルマイノリティー（性的少数者）を意味する言葉として使われています。ここでは、このような分類が重要なのではなく、次の2つが大切だと思うのです。

○多数、少数にかかわらず、多様な人が現にいるということ。

○だからと言って、この人はこんな人だ、○×で決めつけられない、常にスペクトラム（連続体であり、その切れ目ははっきりしていない）であるということ。

よくよく考えてみると、やっぱり、一人ひとりが違っている、違って当たり前だということ、といういわば当たり前のことが、民主主義の本質だということですね。

だから、多数決ではなく、少数者の意見に耳を傾け、みんなで対話を重ね、新しいみんなが自由になれるような納得解を導くことが大切なのだと思います。自治って、たぶんそんなことではないかなあと思うのです。こうあるべきを超えて、自分たちで考え、自分たちでこうなりたいと合意形成を図り、自分たちで実践する。そんな4年生たちの姿に、私は感動させられたのだと思います。ちなみに、その動画に私も入れてもらいました。不慣れでぎこちない演技にも関わらず、喜んでくれた子どもたちのやさしさにも触れた一幕でした。

